

舞踊家

山村

Kosho
YAMAMURA

幸勝



舞踊家、日本舞踊山村流師範。あやめ会、こどもあゆみ会主宰。
1996年、大阪狭山市舞踊協会を設立、会長。
大阪狭山市芸術祭に流派を超えた舞踊会「さやまおどり」の会を企画。
伝統文化としての日本舞踊の発展に力をそそぐ。
特にこども達への教育としてもその必要性を強く説き、
伝統文化こども教室を開設する。
平成18年度大阪狭山市教育文化功労者表彰を受ける。

「大阪狭山に生きる人」今回は長年にわたりこの町で日本舞踊の継承と指導に力を注いでこられた舞踊家、山村幸勝さん（本名・西村勝子）のご紹介です。
毅然とした清潔感の中に艶やかな色が漂い観る者を楽しませてきたその舞姿ですが、先ずはその仕事場ともいうべき稽古場を訪れました。

「〇〇さん、腰が浮いている。もっとお腹に力を入れて！顔は正面。」弟子達の振りを見つと見ていた幸勝さんから叱声が飛ぶ。途端、場に緊張感が走る。うーっと立ち上がって踊っていた弟子達の前に近づくと、自らその振りをして見せる。その姿には来年古稀を迎えようとする老いの気配は微塵もありません。美しく舞う舞台の姿と共に、次世代への文化の継承に取り組みまっすぐな姿勢がひしと感じられました。

4歳から始まった舞踊家への道

現在大阪狭山市東茱萸木在住の幸勝さんは、鉄工所を営む踊り好きの堤市松さんを父に、山村流の舞踊師範山村雅勇幸さんを母として堺市に生まれました。踊りは何歳から始めたのかを問うと「母が踊っていたのでいつともなく気がついていたら踊っていました。

最後に聞きました、今後の活動と夢を

「これからは指導者を育てることと力を注ぎます。そして夢はこの大阪狭山で歌舞伎風の舞踊芝居をやりたいと思っています。」とまだまだ踊りに情熱を燃やし続ける素敵な大阪狭山人です。

で一年余で退職。しかしその苦手だった部分も懸命に稽古をつけている間に克服できたようです。幸勝さんの舞いは山村流でも男舞（おとこまい）を得意としています。お母さんが亡くなられたあと位から女舞（おんなまい）も踊るようになったそうです。ご本人「優しくなったのかな」。こうして多くの舞台を踏み、弟子を指導するうちに、自らが踊り手として踊るといふこと他に、踊りを創り出す「振り付」という仕事に新たな興味を持つようになりま

す。これまでの実践で身につけた所作（しよさ）に自らが生み出した振りを施すことで創り上げる創作舞踊の分野の面白さに魅せられ、精神的に振り付者として活動を始め実力を発揮します。幸勝さんの作品は山村流の持つ品格の中にふと垣間見える愛らしさ、滑稽さがエッセンスとなり

幸勝流の特徴となっています。「教える喜びと、完成させてゆく過程が楽しくてがむしやりに踊り、創作し指導を続けてきたように思います。」と舞踊家として歩んできた50年を振り返ります。今一つ忘れてはならないのは20年以上にも及ぶ子ども達への指導です。公民館での「伝統文化こども教室」をはじめ市内小学校でのクラブ活動や放課後教室など。「文化を伝えてゆくには、先ず体験させないと何も始まりません。経験はいつか何かにつながってゆく筈。踊りを習っている内に着物を着ることが出来るようになる。又更に大切な礼儀も身に付くこととなる。」幸勝さんの願いです。その活動を支える人々は云います。「こどもたちの指導にあたる情熱はとにかく純粋で、その姿はまぶしい。」



大阪狭山市立南第三小学校区 元気っこクラブとは

子どもたちが、放課後に安全で安心して過ごせる新しいカタチの居場所づくりとして、子どもの活動拠点をめざして、「こども広場」「学習チューター事業」「放課後児童会」との連携を図り、遊び・体験・交流・学習支援など様々な分野の場を提供するものです。

た。正式に母に習い始めたのは4歳位だったと思います。」と返ってきました。10歳になった頃、三味線琴など昔曲の稽古を始め、高校に上がる頃には山村流を学ぶものにとって習得が難しいとされている地唄の「間合い」も身に付けていたそうです。因に山村流は上方に発祥する流派で地唄舞を基としています。

反抗期、日本舞踊をやることに疑問

それでも多感な高校時代にはバレエに憧れ日本舞踊をやっていることで古風なイメージを持た

母の体調に不安が生じ決心

れるのではないかと、そっと近くのパレエ教室に通ったり、学校ではダンスクラブに入り、又乗馬にも挑戦したりして出来るだけ踊りから離れようとしたそうです。その頃、幸勝さんの心の中に踊りは母が師匠なので、母のために仕方なくやっているという気持ちが生じていて、「もうやめるわ」と口に出すこともしばしば。踊りを続けることに疑問を感じたこともあったそうです。

高校時代の半ばに母の体調に変化が起こり、苦痛に耐えて稽古をつける母の姿を目の当たりにして、「母を助けるには自分が一歩も早く一人前のお師匠にならねば」とと踊りを続ける覚悟が出来たといえます。そしてお母さんの代稽古や出稽古を務めるようになり、懸命な努力の結果、20歳の時、山村流より山村雅勇幸勝の名取りとなり西村正雄さんと結婚、23歳で師範の資格を得て一人前の踊り手として、又師範として一本立ちを致します。高校を卒業した時に一時社会を知るために証券会社に就職、オフィスレディーを経験しますが、人見知りをする恥ずかしがり屋で、人と話すのが大変苦手だったの

